

《巻頭言》

『国際関係論』を執筆して

——『歴史と未来』第一九号刊行にあたって——

中 嶋 嶺 雄

国際関係論という新しい学問領域に身を投じ、大学の教壇で国際関係論を担当して以来、いつの間にか四半世紀に近い年月を経てしまった。そのような私にとって、国際関係論に関する概論的な著書を単著として刊行することは、長年の念願であったが、ようやく脱稿して近く『国際関係論——同時代史への羅針盤——』と題し、中公新書の一冊に加えられることになった。

もとより、国際関係論についてのすぐれた著作やテキストは、わが国でも、近年の国際関係論の急速な学問的發展のなかで、すでに数多く存在している。しかし、私でも理解しづらいような難しい内容のものもあったり、また、あまりにも専門的でありすぎる場合も多々見受けられ、学部学生や大学院生のみならず、広く一般の方々にも読んでいただけるような入門的もしくは啓蒙的な概説書は意外に少ないようにも思われる。大学においても、すでにわが子たちよりも年少の諸君が国際関係論を受講していることを思うと、できるだけわかりやすくしかもこの一冊ではほ国際関係論の諸分野をとりあえずはカバーできるように著作が必要だという気持ちをおさえがたく、本書の執筆に到った次第である。

しかし、いざ執筆に取りかかってみると、国際関係論という学問の間口の広さもあって、このような本を書きあげることは、きわめて困難な作業であった。大学の教壇に立つことになって以来、国際関係論に関する内外の参考文献も数多く集めていたのに、それらを集中的に読む時間もなかなか取れずにしたけれど、今回は、そのような作業も経なければならなかったのは当然である。

一九六〇年代末の大学紛争で、私の研究室がこれ以上は想像もできないほど荒され、火をつけられたり、水や油をかけられて、ページが壊れない国際関係論のテキストが何冊もあったが、今回は、そうした物も、一ページごとに注意してはがし、読みすすんでいった。まことに痛切な思いであった。

本書は、そのような私にとっても記念すべきものであるが、三十年前後にわたって国際関係論とは何かという問題と苦闘してきた私自身の体験も、すべて、本書に投げこんだつもりである。

想えば私が学生の頃には、大学で国際関係論は非常勤講師が担当する一科目として存在したのみであり、テキストも方法論もなく、ただ国際問題の事情講義のようなものであったような気がする。大学院では、すでに国際関係論の研究分野が確立途上であり、実に多くの教えを受けたのであるが、程なく私自身が教壇に立つようになってみると、そこに様々な壁が立ちはだかっていたことも事実である。

そうしたなかで私の勤務校では、大学紛争ののちのカリキュラム改革によって一九六九年度から、初めて国際関係論が専任教官による基礎教育科目および専修科目として開講され、七五年度には正式に国際関係論の講座化が実現したが、当時はまだ国立大学では、私の勤務先も含めて四大学にしか国際関係論の講座が存在していなかった。一九七七年度からは国際関係論講座は実験講座となり、この年からは地域研究研究所修士課程発足とともに大学院でも国際関係論が教授されるようになった。今一九九二年度には、本誌でもしばしば言及した念願の大学院博士課程（地域文化研究科）が発足して、そこでも授業がおこなわれている。このようなプロセスをあえて記したのは、今日の国際関係論の隆盛にもかかわらず、まだわが国の大学・研究機関では決して十分な研究・教育体制が整っていないことを改めて理解していただくためである。

私は、多忙な日常のなかで、本書を長年の準備ののち、去る六月初旬から八月初旬まで集中して一気に書き下ろしたのだが、その二カ月間はまさに煉獄の日夜であった。今振り返ってみると、これで私の教員生活にもようやく一区切りがついたような気がする。もっと早く、このような書を仕上げて系統的な講義をおこなうべきであったのに、それが果たせなかったことには忸怩たるものがあるけれど、脱冷戦と脱社会主義という今日の世界の歴史的な大変動を見るにつけ、かえってタイミングはよかったのではないかとも思っている。

右に記したような経緯もあるので、私は本書を私の講義に列してくれた学生・院生諸君、とくに私のゼミの会の諸君に捧げたいと思っ

ている。

(一九九二年十一月五日)